

# 2014 年度 センター試験 数学Ⅱ・B (本試験) 分析

## 全体概況

試験時間 60 分

大問数・解答数	大問数：4 題選択			
難易度の変化（対昨年）	○ 難化	○ やや難化	● 変化なし	○ やや易化 ○ 易化
問題の分量（対昨年）	● 増加	○ 変化なし	○ 減少	
出題分野の変化	● あり	○ なし		
出題形式の変化	○ あり	● なし		
新傾向の問題	○ あり	● なし		
<p>総評                  解答数は増えてはいるが、計算量は昨年並であった。出題分野は、基本的に昨年度を踏襲したものになっているものの、ベクトルとの融合問題としてかろうじて残っていた「三角関数」の問題が完全に姿を消した。昨年度から引き続き、いくつかの設問を選択式にするなど目新しい出題もあるが、例年以上に誘導が丁寧な出題となっている。ただし問題文が長く、既出の数値を用いる部分が多くあるなど、高得点を取るには問題文を正確に読解することが必要である。</p>				

## 大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	コメント
第 1 問	〔1〕 図形と方程式 〔2〕 指数・対数関数	30 点	〔1〕「昨年度と同様、「図形と方程式」の分野での単独の出題。2 直線の垂直条件、点と直線の距離の公式、円の方程式、分点に関する基本問題である。 〔2〕 対数不等式の自然数解の個数の問題。センター試験の出題テーマとしては目新しいが、誘導に従えば無理なく解答できるようになっている。
第 2 問	微分法・積分法	30 点	極大・極小、接線、面積に関する標準的な問題。(1)における“極値を持つ条件を選択させる問題”が目新しいが、“ $f'(x)$ の符号を考えることにより”と問題文中で丁寧に誘導されている。典型的なテーマの問題であるため解きやすい問題であったと思われる。
第 3 問	数列	20 点	(1) は“階差数列”に関する基本問題。 (2) は典型的でない漸化式を、誘導に従って解く問題。昨年度の問題同様に誘導が親切なので、問題文を丁寧に読めば、無理なく解答できるようになっている。
第 4 問	ベクトル	20 点	昨年度の平面ベクトルとは変わって、空間ベクトルの標準的な問題である。典型的なテーマの問題、かつ誘導に従えば無理なく解答できるようになっている。計算も(過去の空間ベクトルの問題と比べて) やや少なめである。
第 5 問	統計	20 点	省略
第 6 問	数値計算とコンピュータ	20 点	省略